経済学入門

千種

慶應義塾大学教授
千種義人著

経済学入門（増補版）

同文館

著者紹介

昭和 12 年　慶応義塾大学卒業

現　　在　慶応義塾大学教授

おもな著書

「経済原論総説」「計画経済概論」「現代景気理論」「資本主義の将来」

昭和30年11月20日　初版発行
昭和35年 2 月10日　15版発行　　略称―千種経済

経済学入門（増補版）　¥ 630.

著　者 © 千　種　義　人

発行者　同文館出版株式会社
熊井征太郎

東京都文京区西江戸川町19

印刷所　藤本綜合印刷株式会社
藤本　塾

発行所　東京都千代田区神田神保町1-23　同文館出版株式会社
電話東京（291）1822・9427～8 振替東京135

落丁・乱丁本はお取替え致します　（関口製本）

序

本書は経済学を初めて学ぶ人々に、現代経済社会の特質と現代経済学の主流を理解するための基礎を講じようとするものである。

さきに私は、このような意図をもって「経済原論総説」を公にし、続いて各論の準備を行ってきたのであるが、その間、欧米並びにわが国の経済学は飛躍的進歩をとげ、到底旧稿のままでは、経済原論の名の下に出版できないことを悟った。そうかといって、刻々と進歩する最新の経済理論をあらゆる分野にわたって吸収し、各論の面目を整えることも容易なことではない。このようなディレンマに陥って、各論の続刊を躊躇して今日に至った。

しかしこういう考えが閃いた。最新の経済理論のすべてが、現代経済社会を理解するための最良の道具であるとは限らない。それが最良の道具であるかどうかは、もう暫く経過しなければ分らない。たとえそれが最良の道具であるとしても、それを会得するためにはかなり準備が必要である。それにはいわゆる経済原論を超えた知識を必要とするであろうが、また経済原論の知識なくしては不可能であろう。最近の学生の傾向を見ると、多くが最新流行の経済理論に飛びつこうとして懸命である。このような傾向は当然なことであり、また喜こばしいことでもある。しかしこれら学生の多くは、流行以外の経済理論については極めて浅い知識しか持っていない。これではまるで片輪の経済学徒が生れてしまう。経済社会の本質は昔も今もそんなに変っているものではない。経済

の本質的なものを追求しようとする意図は、むしろ旧来の経済学の方が強かったかもしれない。最新の経済理論は、現象の本質的理解を離れて、余りにも形式的、操作的に流れ過ぎているようにも思われる。もちろんこの傾向がいけないというのではない。優れた経済学者は本質的なものを一応把握した上で、しかもなおよりよく把握しようとして、そのための最新の武器をつくろうとしているのである。しかし経済学を初めて学ぶ人達の中には、これらの最新の武器を学ぶことにのみ専心し、経済現象の本質的理解を忘れている者がいる。このような傾向は好ましいとはいえないであろう。そこで最新の経済理論に興味を有する学生にも、また経済学の一応の知識を得ようとしている人にも、役立つような経済原論はやはり必要ではないかと思ったのである。

このような考えから、これまで数年間準備してきた原稿を整理して見ようという気になった。それでも経済原論という名の下で発行することはやはり躊躇された。たまたま同文館の田代均氏から「経済学入門」としてならよいではないかと熱心にすすめられ、それならばというので、この夏休みを利用して、旧来の原稿を整理し、新たにかなりの枚数をつけ加えて、でき上ったのが本書である。

これまで既に、高橋誠一郎教授、小泉信三博士、高田保馬教授、中山伊知郎教授、栗村雄吉教授等によって優れた経済原論が公刊されており、今更これに附加すべきものはないのであるが、経済原論の講義を担当している以上、たとえ不完全なものであっても、一応テキストをつくっておく必要を痛感した。これもまた本書をまとめるに至った一つの動機である。本書は以上の諸先生の著作や教えに負うところ極めて大であって、これを機会に諸先生に深甚の感謝を捧げたい。

本書の第一章は、かって出版した「経済原論総説」を要約したものである。第二章以下は、これまで何冊かに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

分ける豫定で準備してきたものを適宜に切り捨て、足りない部分を補って、でき上ったものである。本書の狙いは、もとより経済学の基礎概念と基礎理論を万遍なく述べることにあるが、その際、経済現象にとって本質的なもの、およびこれまで経済学において最も大切であるとみなされてきたものを重点的に詳述しようとしたところにある。例えば価値とは何か、価格は如何にして決定されるか、貨幣の本質は何か、貨幣価値はどうして決定するか、賃金や利子の特質はどうか、景気変動や失業はどうして起るか等に関する部分がそれである。各章節の説明が必らずしもバランスを得ていないのは、このためである。貨幣制度、金融、財政等の節は全く入門程度のことしか述べていない。これらの部分については、読者はそれぞれ専門書を繙いて頂きたい。

諸先輩並びに読者からの御鞭韃と叱正を念願する次第である。

昭和三十年十月

千ヶ滝において

千　種　義　人

目次

第一章　総　論……三

第一節　経済とは何か……三

経済的欲望……（三）　欲望充足の行為……（四）

経済財と自由財……（五）　経済の本質……（七）

経済的とは何か……（八）　経済的価値……（一一）

経済の社会性……（一三）　経済の与件……（一六）

国家と経済との関係……（一七）

第二節　経済の発展段階……一九

第三節　現在の経済機構……二三

資本主義経済……（二三）　資本主義経済の発展……（二七）

統制経済……（三三）　社会主義経済……（三六）

第四節　経済学の部門……四一

社会科学としての経済学……（四二）　経済学の三部門……（四六）

経済史と経済理論との関係……（四六）　経済理論と経済政策との関係……（四七）

経済学の分化……（四九）　経済原論の区分……（五〇）

第二章　消費論……五三

第一節　総論……五三

第二節　個人的価値の成立……五六

個人的価値成立の理由……（五六）　個人的価値と效用との差……（五八）

個人的使用価値と個人的交換価値……（五九）

第三節　欲望と效用……六〇

欲望の性質……（六〇）　效用発生の条件……（六四）

全部效用と限界效用……（六五）　限界效用逓減の法則……（六九）

第四節　消費に関する諸法則……七一

限界效用均等の法則……（七一）　消費者余剰……（七四）

エンゲルの法則……（七五）　消費函数、消費性向……（七六）

第五節　消費者需要の法則……七七

需要函数……（七八）　需要の弾力性……（七八）

上級財と下級財の需要……（八一）　所得效果と代替效果……（八二）

関連財の需要……（八四）　效用の可測性……（八五）

個人間の效用比較の可能性……（八八）

第六節　無差別曲線の理論……八九

無差別曲線の概念……（八九）
效用概念の放棄……（九三）
限界代替率逓減の法則……（九六）
無差別曲線の性質……（九一）
限界代替率……（九五）
無差別曲線を用いての消費者需要の法則の説明……（九六）

第三章　生　産　論……一〇一

第一節　生　産　要　素……一〇一

生産の意味……（一〇一）
自　然……（一〇二）
人　口……（一〇四）
企　業……（一一四）
生産の三要素……（一〇一）
労　働……（一〇二）
資　本……（一〇八）

第二節　産業構造……一一七

第三節　生　産　費……一一九

生産費とは何か……（一一九）
不変費用と可変費用……（一二〇）
生　産　係　数……（一二一）
直接費用と間接費用……（一二〇）
平均費用と限界費用……（一二〇）
生　産　函　数……（一二二）

第四節　生産に関する諸法則……一二三

費用逓減の法則と費用逓増の法則……（一二三）
大量生産の法則……（一二三）
限界収益均等の法則……（一二四）
大規模生産の法則……（一二三）
報酬逓減の法則と報酬逓増の法則……（一二三）
生産者余剰……（一二七）

第五節　供給の法則……一二七
供給函数……（一二八）
供給の弾力性……（一二九）
価格と限界生産費の一致……（一三〇）
社会的供給曲線……（一三一）
長期供給曲線……（一三二）

第四章　交換論……一三四

第一節　総論……一三四
交換論の課題……（一三四）
市場の意味……（一三四）

第二節　経済的価値……一三五
価値概念……（一三五）
スミスの価値概念……（一三六）
リカードオの価値概念……（一三七）
ミルの価値概念……（一三八）
マルクスの価値概念……（一三九）
メンガーおよびボェーム・バヴェルクの価値概念……（一四〇）
マーシャルおよびワルラスの価値概念……（一四一）
個人的価値と社会的価値……（一四二）

第三節　価格の決定……一四八
価格の意味……（一四八）
生産費説……（一四八）
労働価値説……（一五三）
限界效用説……（一六六）
均衡論……（一六九）
蜘蛛の巣の定理……（一七一）
均衡の安定……（一七三）
稀少価格……（一七五）
一般均衡論……（一七六）

第四節　独占価格……一八〇
独占の種類……（一八〇）　完全独占価格……（一八一）
差別独占価格……（一八四）　寡占価格……（一八六）

第五章　貨幣論……一八八

第一節　貨幣の生成……一八八
貨幣の起源……（一八八）　貨幣の発達……（一九〇）

第二節　貨幣の職能……一九一
本源的職能……（一九二）　派生的職能……（一九七）

第三節　貨幣の本質……二〇〇
貨幣の本質に関する諸学説……（二〇〇）　貨幣商品説……（二〇一）
貨幣国定説……（二〇三）　貨幣票券説……（二〇六）
抽象的計算単位説……（二〇八）　貨幣職能説……（二一〇）

第四節　貨幣制度……二一二
本位制度……（二一二）　グレシャムの法則……（二一四）
不換紙幣……（二一五）　銀行主義と通貨主義……（二一五）
預金貨幣……（二一七）　補助貨幣……（二一七）

第五節　貨幣の価値……二一八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

貨幣価値の意味……（二二八）　貨幣価値の測定……（二二〇）
第六節　貨幣の対外価値……二二三
為替相場の建方……（二二三）　外国為替手形……（二二四）
国際貸借説……（二二五）　購買力平価説……（二二六）
為替心理説……（二二八）　為替の裁定……（二二九）
国際通貨基金……（二二〇）
第七節　国際貿易……二二一
国際貿易が行われるための条件……（二二一）　比較生産費説……（二二一）
国際需要均等の法則……（二二二）
第八節　インフレーション……二二四
インフレーション……（二二五）　金量に対する不換紙幣の過剰……（二二八）
商品量に対する通貨の過剰……（二二九）　諸価格の跛行的騰貴……（二二〇）
第九節　貨幣価値の決定……二二一
貨幣数量説……（二二一）　貨幣数量説批判……（二二七）
金数量説……（二二九）　所得数量説……（二二一）
現金残高数量説……（二二六）
第十節　貨幣価値の変動……二二四
貨幣ヴェール観……（二二五）　自然利子率と貨幣利子率の乖離……（二二七）

貨幣的要因による相対価格の変化……（二七〇）
貨幣的要因による生産構造の変化……（二七二）
貯蓄投資の関係と物価水準……（二七三）

第六章　金融と財政……二七八
第一節　金融……二七八
第二節　財政……二八二

第七章　分配論……二八八
第一節　総論……二八八
分配論の課題……（二八八）
所得の種類……（二八九）
所得の処分……（二八九）

第二節　賃金……二九〇
賃金の種類……（二九〇）
賃金の決定……（二九一）
労働の需要……（二九二）
労働の供給……（二九四）
労働の双方独占……（二九七）
賃金の硬直性……（三〇二）
労働生産費説……（三〇四）
賃金基金説……（三〇六）
新賃金基金説……（三〇七）
労働生産力説……（三一二）
産業平和……（三一四）

第三節　地代……三一六

地代の概念……（三一六）
絶対地代説……（三一九）
差額地代説……（三一六）

第四節　利　子……三二〇

利子の概念……（三二〇）
生産のための資本需要……（三二三）
資本の供給……（三二五）
自然利子率の決定……（三二一）
利子論の歴史……（三三七）
利用説……（三四〇）
限界生産力説……（三四二）
流動性選択説……（三四四）
消費のための資本の需要……（三二二）
投機のための資本需要……（三二四）
利子率の決定と変動……（三二九）
収益財の資本価値……（三三五）
制欲説……（三三九）
時差説……（三四〇）
動態説……（三四三）
貸付資金説……（三四五）

第五節　利　潤……三四五

利潤の意味……（三四五）
企業利潤の構成……（三四六）
企業の資本構成……（三四六）
利潤発生の理由……（三四八）

第六節　派生的所得……三五〇

消費者に直接売られる労働の代価……（三五〇）
恩給、社会保険等……（三五一）
公共団体に対し提供される労働……（三五〇）

第七節　所得分布……三五一

パレート法則……（三五一）　ローレンツ曲線……（三五三）
不平等の原因……（三五三）　労働者の分前……（三五四）

第八章　国民所得論……三五六

第一節　総論……三五六
国民所得論の意義……（三五六）　国民所得の定義……（三五七）
国民所得から除外される項目……（三五八）　国民所得の種々の面……（三五八）

第二節　生産国民所得……三五九
粗国民所得―粗国民生産物……（三五九）　純国民所得―純国民生産物……（三六一）

第三節　分配国民所得……三六一
分配国民所得―国民所得……（三六二）　支出国民所得―個人所得……（三六二）
可処分所得……（三六三）

第四節　国民所得概念の用途……三六四
粗国民所得概念の用途……（三六四）　純国民所得概念の用途……（三六四）
分配国民所得概念の用途……（三六五）

第五節　国民所得の収支……三六五
政府が介入しない場合……（三六五）　政府が介入する場合……（三六六）

第六節　国民所得の決定……三六七

第七節　国民所得の算定……三六九
国民所得の計算方法……（三七〇）　国民所得の変動の測定……（三七〇）

第九章　動態論……三七二

第一節　静学と動学……三七二
静学と動学の概念……（三七二）　静学の構造……（三七四）
静学一元論……（三七四）　静動二元論……（三七六）
動学一元論……（三七九）　時間的要素の導入……（三八一）

第二節　経済の変動……三八四
経済変動の分類……（三八四）　偶発的変動……（三八四）
経済の成長……（三八五）　波動的変動……（三八五）
雇用量の変動……（三八六）

第三節　経済の成長……三八六
経済の量的成長……（三八六）　経済の質的成長……（三八七）
マルクス再生産表式……（三八七）　ケインズ「一般理論」の一般化……（三九一）
長期沈滞の理論……（三九三）　経済成長の理論……（三九五）

第四節　景気変動……四〇〇
景気変動の概念……（四〇〇）　暑気変動の諸様相……（四〇一）

景気変動の原因……（四〇七）
第五節　景気変動の理論（その一）……（四〇九）
セイの販路説……（四〇九）　マルサスの一般的過剰生産説……（四一一）
シスモンディの所得不足説……（四一三）　ミルの折衷説……（四一四）
帰納的景気理論……（四一五）　ツガン・バラノウスキー説……（四一六）
シュピートホッフ説……（四一九）　景気の予測……（四二〇）
ハーヴァード・バロメーター……（四二二）　ドイツ景気研究所バロメーター……（四二三）
第六節　景気変動の理論（その二）……四二六
マルクスの恐慌理論……（四二六）　ハイエクの景気理論……（四三〇）
第七節　景気変動の理論（その三）……四四四
加速度原理……（四四四）　加速度原理と投資乗数の綜合……（四四七）
加速度乗数の大いさを支配する要因……（四五二）　景気理論の最近の動向……（四五四）
第八節　雇用量の変動（その一）……四五六
失業の種類と原因……（四五六）　産業予備軍の発生……（四五七）
第九節　雇用量の変動（その二）……四六二
一般理論の意義……（四六二）　古典派雇用理論に対するケインズの批判……（四六四）
有効需要の原理……（四六七）　雇用量決定の要因……（四七〇）
完全雇用実現の方法……（四七一）　消費性向の増大……（四七三）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com